

# 緒 言

2022-2023 年度代表幹事 藤原千沙

学会誌『経済社会とジェンダー』第8巻をお届けします。2022年度大会の共通論題報告を踏まえた論文4本、会員の著作と翻訳書の書評2本のほか、若手研究者支援として学会が開催した「フェミニスト社会科学の授業実践ワークショップ」について報告を寄せていただきました。2022年度の活動記録とともにご覧ください。2022年度大会にご尽力いただいた方々、本誌編集委員会の皆さまに、厚く御礼申し上げます。

本学会においても、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けて、2020年度・2021年度の大会はオンライン開催を余儀なくされました。会員同士が対面で交流する機会が制約されてきたなかで、2022年度大会は3年ぶりの対面開催が実現し、早稲田大学にて、オンラインを併用しつつ、活発な議論が行われました。総会では2022-2023年度幹事・監査が選出され、新体制がスタートしました。今期の幹事会では、大会の開催、学会誌の発行、若手研究者支援等これまでの活動を続けるとともに、今期の活動のひとつとして、*The Routledge Handbook of Feminist Economics* (edited by Günseli Berik and Ebru Kongar, London: Routledge, 2021.) を翻訳・出版するプロジェクトを立ち上げました。すでにハンドブック編集委員会が発足し、2023年4月～2024年4月までの13か月間、各章を検討する読書会を毎月オンラインで定期開催しています。年1回の大会と学会誌以外の場で、会員が学び交流する場としてご活用ください。

本学会の前身である「フェミニスト経済学日本フォーラム」が2004年に設立されてから間もなく20年を迎えます。私はその設立集会に参加しながら、これまで自分の専門はフェミニスト経済学であると表してきませんでした。フェミニスト経済学を名乗っていないのか自信がなかったからですが、本学会の皆さんと一緒に勉強する機会を重ねて、ようやくどんな学問なのか少しずつ見えてきた気がします。2022年度大会の共通論題はフェミニスト経済学として“政治・権力”を問うものでしたが、政治学はもちろん、社会学、歴史学、開発学、環境学、地理学、福祉学、倫理学など、「経済学」以外の学問領域の知見が欠かせない学問です。これからも本学会の皆さんとともに、さまざまな学問と実践から学びつつ、フェミニスト経済学を日本においても発展させていきたいと思えます。会員の皆さまの変わらぬご協力をお願い申し上げます。